サケの稚魚順調に

20日 富磯小生が3千匹放流

富磯小が総合的な学習の一環で1988年から取組んでいる伝統の「サケの稚魚放流」。今年も約3000匹の稚魚が同校の水槽でしっかりと育つ。放流日となる「サケの子どもとお別れする会」は、20日午前10時10分から校舎近くを流れる追久間内川から放流し、全校児童や教職員らが大海での成長と、数年後の回帰を願う。

生命の尊厳を学び、自然を愛する心を育てることなどが目的。昨年12月5日に宗谷管内さけ・ます増殖事業協会中頓別ふ化場から、約3000粒の発眼卵を譲り受けた。同校では「サケを迎える会」を開き、児童達が水槽の中に優しく入れた。

飼育から10日ほど経つとふ化が始まり、しばらくは腹部にある卵のうから栄養分を吸収して育ち、周囲の日光や音を遮断するため暗幕をかけて成長を見守った。2月下旬からは児童や公務補が魚粉をすり潰したものを給餌。児童達は餌を食べている姿に喜んでいた。

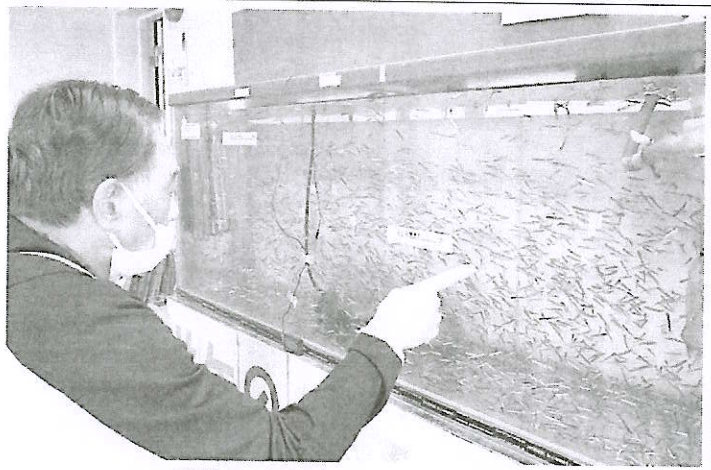
水温はふ化前が7度、ふ化後は5度に調整。水槽は稚魚を飼育しているものと、サンゴの石でろ過させ不純物を取り除き、綺麗にした水を10日に1回交換しているほか、下部に溜まった餌を網ですくい環境を整えている。

3日現在で体長2・5～3㌢まで成長。放流するまでには4㌢まで大きくなるという。放流当日は、児童達が譲り受けた発眼卵からふ化するまでの成長課程、サケの学習を通して学んだことを保護者らに発表する。

そのあとは、追久間内川で、パイプから優しくサケの稚魚を放流。昨年、一昨年は同川での遡上を確認でき、放流したサケが再び戻ってくることを願う。

サケの稚魚の放流は今年で36回目となり、累計放流数は約10万2000匹となっている。

（千葉大輝）



富磯小で飼育しているサケの稚魚